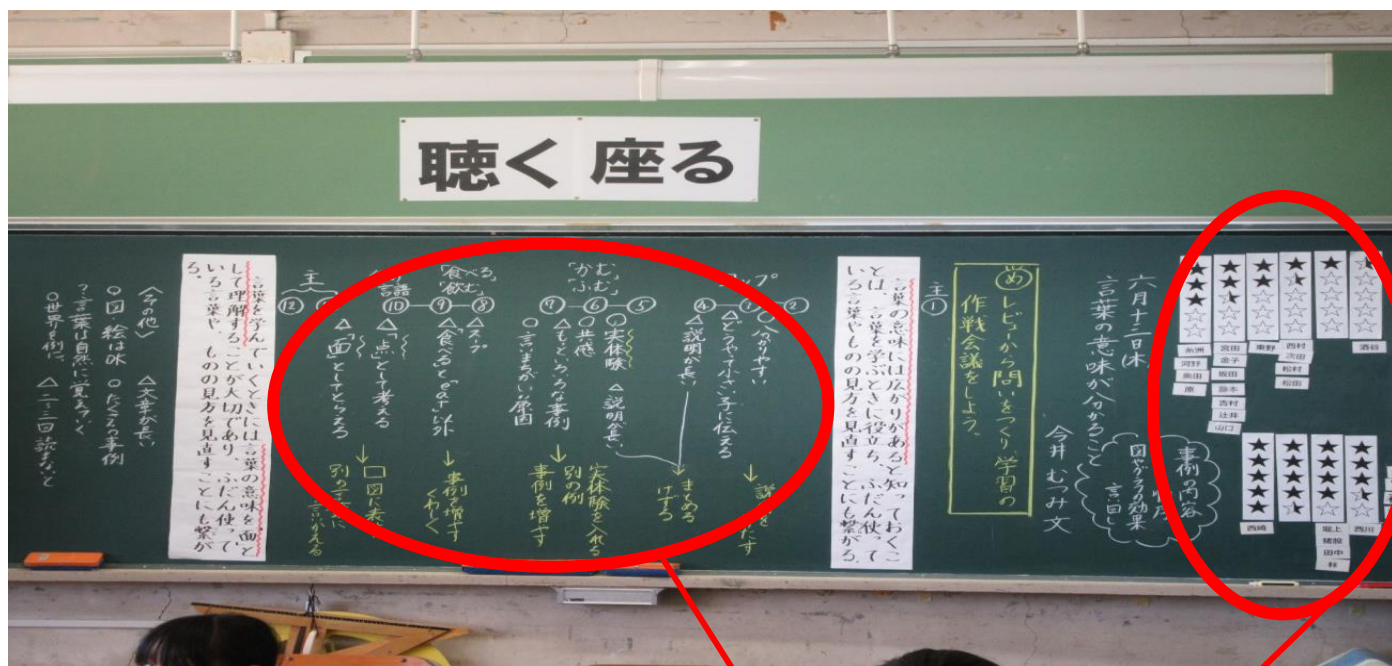




実体験をもとに説明的文章を読み深める

「言葉の意味がわかること」は、〈おわり〉と〈はじめ〉に主張が書かれた双括型の文章構成で、要旨をとらえ自分の考えを持つことがねらいとなる。事例を読んでいく上で実体験をつなげて考えることが、読み深めるポイントとなる。文章構成・書きぶり・事例・筆者の言い回し・筆者の主張に注目するのも有効である。

(例) 五段落の事例で言っていることがよく分かります。なぜかという自分がかつつを着る・ぼうしを着る、と言ってしまった経験を思い出したからです。

今回の授業での評価活動

評価（レビュー）活動

= 批判的読み

自分の主張を提示し、本文から根拠を見つけ、その理由を考えた。単元の最初と最後に批評文を書いて比べ、自分の批評文の正当性を確かめることをねらいとした。理由の中から「1番したいことは？」としぼることで、子どもたちの「考えたい」につながり、子どもの反応から問いになっていく。

問いづくりは 何のために

問いづくりは、子どもたちが「なるほど!」「そうか!」と思う機会を増やすことを目的とし、リフレクション（はね返し・響きあい）を大切にしている。子どもが自分自身の意見を持ち、全員自分の言葉で語り合う授業で、学習は深まっていく。

1. 反応する

既習内容と同じ部分・違う部分を対比させる。

学習を理解するための、「知恵の武器」の確認をする。

2. 問いをもつ

構成・書きぶり・事例の必要性などに疑問をもつ。

3. 問いづくり

どんなことを考えていきたいか、見通しをもつ。

なんで？ を大切に

「この書き方をしているのはなぜ?」「筆者のどういう意図が含まれているのだろう?」と、教材に反応することが大切。教材を深ぼりできる質の高い質問は、毎日の小さな「なんで?」から生まれる。

～すぐに使える!

なんで? を生み出すとりくみ例～

題日記…今日一日に名前をつけてみよう

問い日記…日常の何? を集めてみよう